

小学校の英語必修化における期待

日本人の教師に呼ばれ、小学校 5 年生の生徒何人かが教壇に立ち、中の見えない箱を持って“Raise your hands!”と大きな声で同級生に呼びかけている。ほとんど全員の生徒が我先にと手を挙げた。おとなしそうな女の子が当てられ、その子に教壇に立っている生徒達が“What’s this?”と言い、箱の中に手を入れさせる。女の子は確信したように“It’s a beaker!”と言った。これは、ある世田谷区内の公立小学校の英語の授業を再現した模擬授業で、生徒同士が英語を使ってやり取りをしている様子である。

2011 年 4 月、日本の公立小学校で英語の授業が必修化された。この制度が開始されるにあたり、今まで英語の指導経験のない教師が子供たちに英語を教えている。そのため、教師の能力によって差が生まれかねない。予算の問題もあり、外国人講師を採用できる学校は少ない。これらのことから、発音をはじめ、中学校入学時点での子供たちの英語のレベルに差が生じてしまうという懸念がある。

私たちはこのことを踏まえ、東京都世田谷区の公立小学校の英語教師である森口美佳先生に話を聞いた。森口美佳先生は、必ずしも外国人講師から英語を習う必要はないと考えている。なぜならば、小学校の英語教育の目的はネイティブの発音の習得よりも、グローバル社会で必要な、積極的に外国人とコミュニケーションをとろうとする姿勢の育成であるからだ。また、現在全国の小学校で広く使われている **Hi, Friends!** という教材には DVD も含まれており、生徒達はネイティブの発音にも慣れ親しむことができる。さらに、文部科学省は教師向けに指導の仕方を解説した本も提供しているなど、教師の違いによる教育格差を生じさせないための工夫がされている。

冒頭の模擬授業を行っていたのは、世田谷区内の公立小学校で英語を教えている教師で構成された、世田谷区小学校教育研究会英語活動部である。教師の一人が模擬授業を行い、その改善点について話し合うといった内容の協議会を行っている。そうすることによって、教師は他の教師と意見を交換でき、よりよい授業を実現できる。

2011 年に必修化された英語教育には賛否両論あるが、実際は想像以上に様々な工夫が施されていた。そして教師は、今よりもさらに良い授業を追求している。